

“Among School Children” 分析

——イメージと想念をめぐる——

永 田 節 子*

An Interpretation of “Among School Children”

——Concerning Images and Reveries——

Setsuko Nagata

要旨：W. B. イエイツは“Among School Children”において、ギリシアやアイルランドの神話や伝説などを基にして作り上げたイメージによってイマジネーションの世界を創造し、mortality と immortality との関わりを追い求めた。彼は過去から人々に引き継がれてきた想念とイメージとの関わり的重要性をイメージによって示すことにより、詩人として創作の立場を表明するのである。そして、彼は独立したばかりのアイルランドに独自のアイデンティティを求めて、古代から引き継がれている想念を掘り起こそうとするのである。

Abstract : In the poem, “Among School Children,” composed by W. B. Yeats, he uses Greek and Irish myth and legend to create an ideal world that is related to both mortality and immortality. When Ireland became independent from Britain, he tries to find the true identity of Irish people. In order to do so, he looks in depth into the reveries that are passed on from the past and searches for the ideal images.

Key words : イメージ images 想念 reveries 遺産 heritage

序 論

W. B. イエイツは“Among School Children”において mortality と immortality、言い換えれば、時と永遠、この世とあの世、肉体と魂、現実世界と神話世界などの相反する二つの世界の間に関係を作り上げることができるイメージ、想念 (reverie) を活気付けるイメージを追求するのである。彼は哲学者では解決のつかない問題を詩人として解決しようとする立場、詩人としての創作における基本姿勢をこの作品におい

て表明しているのである。イエイツの“Among School Children”においてこのようなイメージを追求する姿勢は、この作品が創作された当時の時代背景を切り離して考えることはできない。そこで、この作品が作られた当時の状況を振り返ることから作品分析を始めることにしたい。

本 論

1922年にアイルランドがイギリスから独立し、イエイツら当時の文学者たちの活動はどの

*関西福祉科学大学健康福祉学部 教授

ような国家を作り上げていくか、どのような教育をめざすかという問題と切り離せないものであった。1924 年 11 月に公にされた政府の業績と政策の発表のなかには、農業、排水、地方税、電気と鉄道に関する多くの事項とともに、教育に関して、「党と政府はわが国の教育を統合し、民主化とゲール化を進めることを誓う。これらの目標の各々について、すでに大きな進歩がなされている。最貧困層の両親の子供でも、教育階梯の末端から最上段まで上がって行くことが可能であり、アイルランド語はわが国の教育において本来の地位を回復している。」というような宣言が織り込まれていた。しかしながら、1920 年代にはアイルランドの教育制度にはほとんど変化はなく、アイルランドの教育が民主化されたという主張はかなり空疎な響きがあることは否めない。ただこれとは対照的に、教育のゲール化は組織的に試みられた¹⁾。

イエイツは、“School Attendance Bill” というスピーチのなかで、人間の心を外部から規制すること、国家という理念のもとに子供が犠牲とされる傾向のあることに懸念を抱き、アイルランドの歴史やアングロ・アイリッシュ文学、ゲール語を教育のなかで取り上げていかなければならないと述べている²⁾。また、彼は“Magic” という評論において、未開人のほうが私たちよりも神秘的な力をはっきりと、また、より容易く完全に受け止めることはたしかであり、私たちの教育は私たちの魂を鈍らせてしまった³⁾と述べているように、現代において失われてしまったイマジネーションを追求していくのである。

また、イエイツは上院議員としてのスピーチ“School Attendance Bill” において、アイルランドの小学校の建物がいかに子供たちの健康にふさわしくない現状であり、アイルランドの南部で尼僧が教育を行う学校だけが清潔で他の学校がならうべきものであると指摘している。そして、子供たちを清潔で健康的な状況におくこと、十分な食事の必要性などを指摘し、間違っ

た教育より何もしないほうがましで、教育システムを改良したイタリアの教育を見習わなければならぬ等と述べ、更に、この教育システムはすでにアイルランドでも試みられたものであり、現在もアイルランド南部で尼僧によってこの方式で教育が行われている小学校があり、子供たちに恩恵をもたらしていると述べている⁴⁾。このように彼が目にした小学校を視察した経験は 1926 年に“Among School Children” という作品を創作するきっかけとなっているのである。

この作品は、第 1 連において、視学官としての語り手が尼僧の教える教室を歩きながら子供たちが数学、音楽、歴史を学び読書や裁縫をする姿を眺め、子供たちが視学官である 60 歳の老人を見る場面から始まる。第 1 連において子供たちが学んでいると描かれる科目は、イエイツの教育において芸術、文学、歴史を重要視する立場⁵⁾と全く無関係というわけではない。さて、教室における語り手と子供たちとの関係は、第 2 連の最初の詩句、語り手が I dream of a Ledean body と語り始める場面から一変し、読者が想像の世界に引き込まれるように作られているのである。第 3 連になると、一人の女性の姿が教室の少女の姿をとって突然現れるのであり、第 4 連ではさらに、その女性の年老いた現在の姿が取り上げられ、第 5 連では、老人の姿を若い母親のひざの赤ん坊に重ね合わせて、人間の誕生を地上世界と天上世界との関わりから捉えていこうとするのである。第 6 連において哲学者の宇宙観を取り上げ、第 7 連、第 8 連において哲学者に対抗する詩人の立場が表明されることになるのであり、イメージや想像力に対するイエイツの考えがイメージによって展開されることになるのである。そこで次に具体的に第 2 連から第 8 連まで、順を追ってみていくことにしたい。

第 2 連は語り手が少女達のいる教室を視察す

る場面が描かれているが、冒頭の語り手がレダの姿を思い起こすという詩句によって、この作品は現実の世界と想像による世界が重ね合わされていく展開となるのである。

I dream of a Ledaen body, bent
Above a sinking fire, a tale that she
Told of a harsh reproof, or trivial event
That changed some childish day to tragedy –
Told, and it seemed that our two natures blent
Into a sphere from youthful sympathy,
Or else, to alter Plato’s parable,
Into the yolk and white of the one shell.

第2連は、レダの姿を想像するという語り手の言葉により、ギリシア神話におけるレダと白鳥のイメージがこの作品に持ち込まれ想像の世界が作り上げられていく。イエイツは、ギリシア時代の始まりのお告げはレダに対してなされたように想像すると述べている⁶⁾ように、この作品は神話的な時間によって作り上げられているのである。Plato’s Parable という詩句が使われているのも、同様に神話的な時間における時代の始まりを読者に思い起こさせようとする作者の意図がみられるのである。

イエイツはレダと白鳥に姿を変えたゼウスによって生まれた四つの卵のうちの一つの卵から成長したヘレン⁷⁾をモード・ゴンと重ね合わせ、その姿を更にレダに重ね合わせる手法を取っている。そして、その女性の姿をプラトンの『饗宴』における切り離された半身と重ね合わせ、イメージを重層させて作品を構成するのである。プラトンの『饗宴』のなかでアリストパネスが語るころによれば、ゼウスによってちょうどゆで卵を真二つに切るように男と女に切り離された結果、人間はたえずその半身を探さなければならぬのである⁸⁾。イエイツはこの作品において、はるか昔人間が二つに分けられてしまう以前の失われてしまった理想世界への憧れを、イメージを手掛かりとして辿る手法を

取るのである。

語り手と球体から分離された半身に相当する女性、つまりモード・ゴン⁹⁾、レダ、ヘレンが重ね合わされた存在は、語り手にとって理想の世界を作り上げる為に欠くことのできない存在なのである。語り手は現在という時のなかで、想いを寄せた女性と子供時代の話をした過去へと遡るのであり、二人が共感して意気投合したことを彼らが完全な形の球体となっていて、一つの卵の黄みと白身のように思えた語り、かつて存在したはずの理想世界を思い起こすのである。

このように、第2連において語り手は過去に存在したはずである理想世界を振り返るのであるが、第3連は、語り手が年老いた現在においてこのような理想世界が失われてしまっていることが強調され、ギリシア神話の世界で描かれる白鳥の娘達 (daughters of the swan) に重ね合わされた教室の少女達と、現世に属する語り手が対比されることになる。語り手のイマジネーションのなかで白鳥の娘達に変身した少女たちは、ギリシア神話における白鳥に姿を変えたゼウスという不死の世界 (immortality) の系統を引き若さを象徴する存在であり、語り手は老人で現世 (mortality) に属するものとして描かれるのである。“Among School Children” という作品は、既に失われてしまっている理想世界 (immortality) を現世 (mortality) において希求するという構成となっている。このような mortality と immortality という対比は、第五連以降、肉体と魂の関係というテーマが重ね合わされてより一層深められていくことになる。

さて第3連では、mortality と immortality という相反する世界が一瞬交錯して現れる理想の時間空間が描かれることになる。第3連を引用する。

And thinking of that fit of grief or rage
I look upon one child or t’other there

And wonder if she stood so at that age—
 For even daughters of the swan can share
 Something of every paddler's heritage—
 And had that colour upon cheek or hair,
 And thereupon my heart is driven wild:
 She stands before me as a living child.

第 3 連において、現世の教室の少女達はイメージネーションのなかでギリシア神話の世界と重ね合わされ、語り手にとって理想世界を作り上げることを可能とする存在が少女の姿をとって教室に現れることになる。このように想像の世界のなかで mortality と immortality という相反する世界が一瞬交錯するのは、語り手の心が wild と喩えられる状況になった瞬間であり、その瞬間に語り手の目の前にはプラトンにおける完全なる球体の失われた半身である存在が現れるのである。第 2 連は何気なく I dream of Le-dean body という詩句で始まるように作られているけれども、この作品はギリシア神話の世界を手掛かりとして想像の世界に入ることにより mortality と immortality という相反する世界が一瞬交錯した時間空間を作り上げるような構成となっているのである。

ところで、湖面で水を掻いて進む白鳥を paddler と喩えることもできるのであり、paddler's heritage という詩句は、白鳥に姿を変えたゼウスのギリシア神話の世界が現世の人間世界においても人々の想念のなかで想像力の世界に残る遺産として引き継がれ、mortality と immortality という相反する世界を繋ぎ合わせる役割を果たすことが可能となるようにとの作者の想いが密かに込められているのである。

更にまた、paddler's heritage という表現はポセイドン神話とも関係する。かつてポセイドンがアテーナとアッティカの地を争った時、馬を創りだし、馬を御する術を教えたとされる¹⁰⁾が、ポセイドン神話は詩集 *The Tower* のなかで “Among School Children” に続いて配置された作品 “Colonus' Praise” においても引用され

ている。“Colonus' Praise” の最後の連を引用する。

Because this country has a pious mind,
 And so remembers that when all mankind
 But trod the road, or splashed about the shore,
 Poseidon gave it bit and oar,
 Every Colonus lad or lass discourses
 Of that oar and of that bit;
 Summer and winter, day and night,
 Of horses and horses of the sea, white horses.

この作品では、ポセイドンが人類に与えたものは馬だけではなくオールが加えられている。また、1928 年と 1929 年に詩集 *The Tower* として出版された際には、この作品の詩句 or splashed about the shore のところが or paddled by the shore となっており¹¹⁾、paddler という言葉は水を掻いて進む白鳥ばかりでなく舟を漕ぐ人間の姿にも当てはめられることなのである。“Among School Children” において描かれるレダと白鳥神話の世界に “Colonus' Praise” におけるポセイドン神話の世界を重ね合わせてみれば、理想の地に住みオールで舟を漕ぐコロノスの若者の姿は “Among School Children” における白鳥の娘達、つまり教室の少女達の姿と重なり合うのであり、両者とも paddler's heritage の系譜を引くのであり、属する世界はどちらも人類の歴史の始まりにおける理想の時間空間に相当するのである。つまり、paddler's heritage という詩句は、理想の地コロノスで人類が大地を踏みしめ、海辺で舟を漕いでいた樂園から引き継いできた遺産と同様に、レダと白鳥神話における immortality という世界から人類が引き継いできた遺産を暗示しているのである。

イエイツは mortality と immortality という相反する世界の関係を築き上げることのできるイメージを模索し、白鳥、木、ダンス等のイメージにより “Among School Children” を構成する

のである。彼は白鳥を取り上げて多くの詩を書いているが、古来白鳥に対する連想は多く、白鳥は天と地とを繋ぐ天からの使者、死者の霊を天へ運ぶ鳥として、湖水の多いアイルランドでは白鳥にまつわる伝説も多い¹²⁾。イエイツは白鳥のイメージをギリシア神話との関係だけに限定することなく、アイルランドの昔から人々に受け継がれてきた白鳥にまつわる伝説や多くの昔話を作品の下敷きとすることにより、天と地、immortality と mortality との係わりの可能性を探るのである。彼はアイルランドの昔からの伝説や昔話が個人の想念だけでなく民族として受け継がれてきている想念に詩人として取り組んでいるのであり、paddler's heritage という詩句は、民族のなかで昔から受け継がれてきた遺産ともいべき想念に基礎をおいて、アイルランドという国や歴史を作り上げていこうとするイエイツの想いが込められているのである。

さて、第4連では、過去をともに過ごした理想の女性が現在における年老いた姿として語り手の心に浮かび上がるのであり、語り手は現実の時間に引き戻されることになる。想像の世界から現実へ引き戻された語り手は、老人となった自己を再認識し、にこやかに教室の子供たちに微笑み返す自身の姿を年老いた案山子 (old scarecrow) に喩えるのである。

第5連になると、語り手は若い母親のひざに抱かれた赤ん坊に老人の姿を重ね合わせ、産みの苦しみの代償がこのような結果になることを若い母親はどう思うだろうかと問い掛けるのである。このような存在への問い掛けは honey of generation という詩句と関係するのである。第5連を引用する。

What youthful mother, a shape upon her lap
Honey of generation had betrayed,
And that must sleep, shriek, struggled to escape

As recollection or the drug decide,
Would think her son, did she but see that shape
With sixty or more winters on its head
A compensation for the pang of his birth,
Or the uncertainty of his setting forth?

第5連では、赤ん坊と60歳の老人の姿が重ね合わされ、生まれ来ること自体が honey of generation の裏切り行為であると語られるように、この世という時間のなかの存在である人間の生成変化する姿がむなしなものとして描き出される。イエイツは honey of generation という詩句について、“Among School Children” を作った当時は勘違いしていたとする訂正の注を付けている。彼は魂の生まれる前の記憶を失わせるものは honey of generation ではないと述べ、「魂に生まれる前の記憶を失わせるのは、銀河から下降する魂が黄道帯の巨蟹宮で与えられる忘却の一杯のせいである。」というポリフォニーからの引用を注釈にするのである¹³⁾。

イエイツのこのような生まれる前の記憶への関心は、評論“The Philosophy of Shelly's Poetry”にみられる。彼はこの評論で、シェリーが洞窟を象徴として考える時に洞窟を世界だとみなしたプラトンのことを考えなかったはずがないとして洞窟に関して論を進め、ポリフォニーのホメロスの洞窟についての解釈を取り上げ、ホメロスの描く洞窟の二つの門、生殖によってこの世に至る門と、死によって神々のもとに至る門について、更に、銀河から下降する魂が巨蟹宮のあたりでさずかる忘却の杯について触れている。イエイツが honey of generation という語句を使うのは、魂が生れ落ちる以前の世界であるオリーブの木の生える洞窟、魂が肉体という牢獄に閉じ込められることはなく、生殖の世に至る門と死によって神々のもとにいたる上昇の門という二つの門のある洞窟によって象徴される世界¹⁴⁾に関心を抱いているからなのである。イエイツのこのような洞窟、魂がこの世

に生まれる前の世界への関心は、第 8 連において mortality と immortality、つまり、時と永遠、この世とあの世、肉体と魂、現実世界と神話世界などの相反するものが一つとなった世界をイメージによって描き出そうとすることと関係があるのであり、また、第 6 連においてプラトン、アリストテレス、ピタゴラスが取り上げられることにもなるのである。

第 6 連でイエイツは *Old clothes upon old sticks to scare a bird* という詩句において、肉体と魂の関係をもじり、年老いた語り手や哲学者たちの魂と肉体を案山子の古い棒 (old sticks) と、その棒の上にかぶせられたぼろきれの案山子の衣 (old clothes) に喩え、現世に老人として存在する現実の姿を揶揄してみせ、mortality と immortality との関係を作り上げる困難さを描き出そうとするのである。イエイツは 1926 年オリピア・シェイクスピアに宛てた手紙のなかで、老年への呪いを哲学者も有名となった頃には単なる年老いた案山子にすぎないものとして “Among School Children” において取り上げたと述べている¹⁵⁾けれども、彼がプラトンやアリストテレス、ピタゴラス等の哲学者を列挙して、哲学者たちの取り組んだ mortality と immortality という問題に詩人の立場から向き合おうとしたのが “Among School Children” という作品なのである。

ところで、第 6 連では、語り手の抱く存在に関する問題意識は哲学者によって解決されるものではないことが示されたのであるが、第 7 連において想念を活気付かせるイメージこそがこのような問題に立ち向かえるのであることが暗示されるのである。第 7 連は尼僧や母が祈りを捧げても祈りの対象である像はその祈りを聞き届けられないこと、この世における人間の試みのむなしさが語られている。第 7 連を引用する。

Both nuns and mothers worship images,

But those the candles light are not as those
That animate a mother's reveries,
But keep a marble or a bronze repose.
And yet they too break hearts — O Presences
That passion, piety or affection knows,
And that all heavenly glory symbolize —
O self-born mockers of man's enterprise ;

尼僧と母が祈りを捧げる対象である銅像 (images) は、母の想い (reveries) に応えるような銅像ではないと描かれているが、この詩句は別の解釈も可能となるのである。この詩句は想念 (reveries) を活気付けるイメージ (images) が求められているという状況を呈示し、このようなイメージが生み出されることの必要性を暗示しているのである。ここで語られる reveries と images という言葉は、イエイツの想念とイメージとの関係への関心を映し出しているのであり、想念を活気づけるイメージを求めて創作を行う彼の姿勢と関係するのである。彼は “The Philosophy of Shelly's Poetry” という評論で、想念 (reveries) に耽る状態に入ると、その人自身を取り巻く宇宙とその人の存在とが溶け合い、その人の心はその人が存在する時間と場所を超えたイメージを享受することができるようになり、そのイメージは世界や人類の思想を時代とともに新しく変えていくものの一部であると述べている¹⁶⁾。

イエイツは、過去からの人々の想い (reveries) が引き継がれてきたもの (評論 “The Philosophy of Shelly's Poetry” の表現を借りるならば *our little memories*) は、時代とともに変化しつつ世界や人類の思想が引き継がれてきたもの (同様に表現を借りるならば *great Memory*) の一部であるという立場より、人々に受け継がれた想念 (reveries) から生まれるイメージの重要性を示そうとするのである。イエイツは想念 (reveries) を活気付けることのできるイメージを求め、このようなイメージを生み出す想念を民衆に共通する記憶として捉え、このような想

念とイメージを追求することにより、独立後間もないアイルランドの人々のアイデンティティを深めていこうとするのである。

イエイツのイメージや想念への関心は、1925年に行われた上院議員としての“The Child and the State”というスピーチにおいて、ギリシア・ローマからの遺産を教育において取り込む際にも、思想を通してではなく、イマジネーションを通して取り込むことが必要であるとし、情緒(emotion)に重点をおいて教育を行うことの重要性を語っていることにもみられるのである。イエイツは、すべての子供が幼年期から大人になる際に、民族や世界の歴史を経てきた人類の過去からの遺産を、単に思想としてではなく、また、アートスクールの教室の棚に置かれるようなギリシア・ローマの遺物としてでもなく、情緒の一部としてその遺産を引き継ぐことができるようにすることが教育において求められていると述べている¹⁷⁾。このようなイエイツのイマジネーションに対する考え方、人類の過去からの情緒を遺産として引き継ぐことを重視する立場は、“Among School Children”において想念(reveries)を活気付けるイメージ(images)を追求する姿勢や、paddler’s heritage という表現にも反映しているのである。

ところで、尼僧と母が祈る対象である銅像は、情熱と敬虔な想いや愛情を傾ける対象であり、この世のものでない栄光を象徴するものであるが、同時に、人間の試みを無効にし失敗に終わらせ、この世における人間の試みをあざ笑うものとしても描かれているのである。銅像が尼僧や母親の祈りを聞き届けられないばかりか、祈りの対象は祈る側を、この世の存在でないものはこの世の存在の試みをあざ笑う関係しか成り立たないのである。この状況をイメージと想念との関係に当てはめるならば、想念を活気付けるイメージが生み出されることの困難さが示されているのである。

このように、第7連ではこの世の存在ではな

いもの(immortality)がこの世の存在(mortality)に対して優位を保つ関係として描かれているものの、最終連の第8連においては、時(mortality)と永遠(immortality)という相反する世界が交錯して一つの世界を作り上げる様子が描かれるのである。この理想の時間空間は花咲く木とダンスというイメージによって表現されるのであり、イエイツはこのような mortality と immortality とを繋ぎ合わせることのできる、つまり、想念を活気付けることのできるイメージを求めて創作するのである。評論“The Philosophy of Shelly’s Poetry”の最後で、イエイツは、あるイメージを生涯いつくしむならば、その人の魂は無意味な事柄や、この世の潮の満ち干から解放されて、不死の神々が待つ館に導かれるのだ¹⁸⁾と述べているように、immortality という世界に導くことのできるイメージを追い求めることへの関心を持っているのである。イエイツはイメージとこのようなイメージを生み出す源となる想念を追求することを自身の創作の基盤とし、古代よりアイルランドの人々に受け継がれている想念に着目するのである。第8連をみとめることにしたい。

Labour is blossoming or dancing where
The body is not bruised to pleasure soul,
Nor beauty born out of its own despair,
Nor blear-eyed wisdom out of midnight oil.
O chestnut-tree, great-rooted blossomer,
Are you the leaf, the blossom or the bole?
O body swayed to music, O brightening
glance,
How can we know the dancer from the
dance?

第8連で描かれる木のイメージは、エデンの園のずっと奥に主なる神により植えられた生命の木(創世記2.9)のイメージや、大地から天頂に達し太陽と月がその実であるとするカバラの生命の木、つまり、マクロコスモスの象徴で

あるだけでなく人間の魂そのものをも表わす木のイメージ¹⁹⁾が重ね合わされている。イエイツはこのような聖書や古来から伝わる木のイメージによって、アイルランド国民に昔から受け継がれている想念を掘り起こそうという意図を持っているのである。

最終の第 8 連において、肉体と魂の調和した世界、言い換えれば mortality と immortality という相反する二つの世界が一つとなって顕現する時間空間は、天と地を繋ぐ生命の木やダンスのような想念 (reveries) を活気付けるイメージによって構成されているのであり、このような状況を作り上げることができるイメージが想念より生まれ、また、そのイメージが人々の想念を活気付けることが期待されているのである。イエイツは “Among School Children” という作品において mortality と immortality という相反する世界の関係が作り上げられる状況を求め、この世を超えた時間空間をイメージで描き出そうとしたのである。

最終連でダンスというイメージが使われているのは、ダンスは踊り手 (芸術家) と踊り (芸術家の創り上げたもの) との区別がつかない状態を象徴する²⁰⁾からである。詩人の場合に置き換えてみれば、詩人 (芸術家) と作品 (芸術、イメージによって作り上げられたもの) との関係は、詩人が彼の属する時間空間を越えたイメージを享受することのできる状態に相当するのであり、その状態をダンスというイメージで表現するのである。

ダンスというイメージで語られる状況は、想念 (reveries) のなかで人を取り巻く宇宙とその人の存在とが一つになって溶け合う状態になり、人の心が存在する時間と場所を超えたイメージを享受することができるようになる²¹⁾状態を指すのである。人が存在する時間と場所を超えたイメージを享受することができるようになる状態というのは、言い換えれば mortality と immortality という相反する二つの世界が一つとなる時間空間が作り上げられるということな

のである。

第 7 連において尼僧と母親の祈る像 (images) が尼僧と母親の想い (reveries) を打ち砕くと描かれていることは、尼僧と母親が銅像に祈っても祈りが通じないという言葉どおりの意味ばかりでなく、創作における想念 (reveries) とイメージとの関わりにも当てはまるのであり、芸術家が彼をとりまく世界と一つに溶け合い、彼の属する時間空間を越えたイメージを享受できない状況にあることも示しているのである。イエイツが第 8 連で木やダンスのイメージを描き出したのは、第 7 連とは逆の状況、つまり mortality と immortality との相反する世界が一つとなる時間空間を顕現させるイメージを呈示することを目指していたからである。

結 論

この作品は第 7 連まで、魂が天から生れ落ちてきて、この世という時間において肉体の牢獄に閉じ込められ、楽園から追放された人間が永遠の時間にはとどまらず、この世の時のなかで老いて生成変化し、この世を越えた時間空間を求め祈っても、永遠の世界がこの世を嘲る関係にあることが示されている。しかしながら、第 8 連では、木やダンスというイメージによって mortality と immortality という相反する世界が交錯し理想の時間空間が作り上げられることになる。

イエイツは “Among School Children” において、ギリシアやアイルランドの神話や伝説によるイメージを基にしてイマジネーションの世界を創造し、mortality と immortality との関わりを追い求め、過去から人々に引き継がれてきた想念とイメージとの関わり的重要性をイメージによって示し、詩人としての創作の立場を表明するのである。そして、彼は古代から引き継がれている想念を掘り起こそうとするのであり、独立したばかりのアイルランドの人々にアイデンティティを確立しようとしたのである。

参考文献

詩の引用はすべて W. B. Yeats, *The Collected Poems of W. B. Yeats* (London: Macmillan, 1933 rpt.) によるものである。

- 1) テレンス・ブラウン (大島豊訳) 『アイルランド：社会と文化 1922～85 年』(東京、国分社、2000 年) 54-55 頁
- 2) W. B. Yeats, *The Senate Speeches of W. B. Yeats in The W. B. Yeats Collection* CD-ROM. (Cambridge: Inso Corporation Inc. and Chadwyck-Healey Ltd., 1998) pp. 111-112.
- 3) W. B. Yeats, *Essays and Introductions* (London: Macmillan, 1961) p. 41.
- 4) W. B. Yeats, *The Senate Speeches of W. B. Yeats in The W. B. Yeats Collection* CD-ROM, pp. 107-111.
- 5) *Ibid.*, p. 112.
- 6) W. B. Yeats, *A Vision* (London: Macmillan, 1957) p. 268.
- 7) 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』(東京、岩波書店、1960 年) 308 頁
- 8) Ed., Daniel Albright, *W. B. Yeats: The Poems* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1990) p. 668.
- 9) 完全な球体を作り上げる半身に相当するものとして、多くの批評家がモード・ゴンの名を挙げるが、クリアランス・ブルックスのようにモード・ゴンと決め付けないという立場の批評家もいる。本論では、イエイツが想いを寄せていたモード・ゴンの姿を神話世界のレダ、ヘレンに重ね合わせるによりイメージを作り作品を構成しようとした手法に着目したい。
- 10) 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』261-62 頁
- 11) Ed., Peter Allt and Russell K. Alspach, *Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats* (London: Macmillan, 1956) p. 447.
- 12) 鈴木 弘『イエイツ詩辞典』(東京: 本の友社、1994 年) 208 頁
- 13) W. B. Yeats, *The Collected Poems of W. B. Yeats*, p. 535.
- 14) W. B. Yeats, *Essays and Introductions* (London: Macmillan 1961) p. 83.
- 15) Lester I. Conner, *A Yeats Dictionary* (New York: Syracuse University Press 1998) p. 149.
- 16) W. B. Yeats, *Essays and Introductions*, p. 78-80.
- 17) W. B. Yeats, *The Senate Speeches of W. B. Yeats in The W. B. Yeats Collection* CD-ROM, pp. 173-174.
- 18) W. B. Yeats, *Essays and Introductions*, p. 94-95.
- 19) 鈴木 弘『イエイツ詩辞典』106-107 頁
- 20) Ed., Daniel Albright, *W. B. Yeats: The Poems*, p. 672.
- 21) W. B. Yeats, *Essays and Introductions*, p. 78-80.